

## 【閉会挨拶】

## 郷 治 知 道

警察大学校警察政策研究センター 所長

ただいまご紹介にあずかりました、警察大学校警察政策研究センター所長の郷治と申します。本日は本当に大変ためになるお話ばかりで、興味関心は誠につきないところでございますが、プログラムの終了でございますので——共催者としてご指名でありますので——閉会のごあいさつを申し上げます。

まずもって、本日のシンポジウムがこのように盛況のうちに開催されましたことをお喜び申し上げます。また、京都産業大学社会安全・警察学研究所におかれましては——以後御研究所とちょっと短く言わせていただきたいと思いますけれども——本当にめでたく設立10年の節目を迎えられたことにつきまして、田村所長および研究所員の皆さまをはじめ、関係の皆さまには心よりお祝いを申し上げます。おめでとうございます。

御研究所は、親密圏内事案への対応の在り方に関する関連領域を含めたご研究と、警察の在り方に関するご研究とを、2本の柱として精力的に取り組んでこられたと承知しております。その唯一無二で多大な業績につきまして、本日のシンポジウムのテーマに深い造詣をお持ちの皆さまを前にしまして一概に述べることは私の任に堪えず、またその時間も到底ございませんが、この10年間に弊センターも関わりがありました取組みについて簡潔に申し上げます。

2013年の設立記念シンポジウムで、弊センターの主任教授もパネリストを務めております。また同年、サイバー空間の脅威への産学官連携による対処を目指すアメリカの非営利団体でありますNCFTAの代表を招きました実務者対象の講演会で、当時の警察庁のサイバー関連所属の末席を汚しておりました私も、講演者を務めておりますこともこの際申し添えます。

2015年に——こちらに主催者の小山教授もみえておられます——慶応大学の「市民生活の自由と安全」研究会と3者で国際テロ情勢への対応に関するフォーラムを共催しました。研究所員の浦中教授には大変ご尽力をいただきました。

2018年にシンポジウム「児童虐待事案への刑事的介入における多機関連携」、2019年にシンポジウム「児童虐待対応のための警察と福祉の対話を目指して」、また2020年にシンポジウム「性暴力被害者のために何が必要か、何ができるか」を——関わり方はそれぞれ異なりますが——共催しております。

同年、2020年からの警察の説明責任に関する国際共同研究等を含めて、御研究所と弊センターの浅からぬ協力関係につきまして、この場で報告できますことは誠に私にとっても光栄でございます。

御研究所におかれましては、今後ますます社会的に重要なその研究を継続発展させていただきますこと、例えば冒頭でもご説明ありましたがRISTEXプロジェクトにおきまして、被害者学の知見をもとに犯罪の被害を受けた子の、その後の人生にとって事件化が与えるプラスの影響を明確にされましたように、警察関係者が、素朴な正義感といえば正義感をもってする活動の好ましい影響を科学的にまとめていただきますこと、——警察はこれ自分でまとめますけれども、御研究所の知見に大変重みがあると考えますので——これらをぜひお願いしたいと思います。

このような御研究所のご活躍、ご発展への大きな期待を申し述べまして、私の拙いあいさつに代えさせていただきますたく存じます。本日は、本当におめでとうございます。皆さまには本当にありがとうございました。

## 【祝辞】

檜垣重臣

警察庁生活安全局長

警察庁生活安全局長の檜垣重臣でございます。京都産業大学社会安全・警察学研究所におかれましては、本年4月に設立10周年を迎えられ、また、本日、設立10周年記念シンポジウム、「子どもの話を大切にする——犯罪被害を受けた子のための多機関・多職種連携——」を開催されましたこと、心よりお慶び申し上げますとともに、これまでの活動に敬意を表したいと存じます。

研究所におかれては、平成25年4月の設立からこれまでの間に、『児童福祉に携わるひとのための「警察が分かる」ハンドブック』などの作成・公開や、関係機関の相互理解のためのシンポジウムの開催など、さまざまな取り組みを重ねてこられました。警察および関係機関が連携して児童の健全育成に当たるために極めて有益かつ実用的な情報を発信され、提言してこられましたことに対しまして、御礼申し上げます。

さて、警察においては、学校、児童相談所をはじめとする関係機関と有機的に連携しながら保護活動を実施しているところですが、近年の少年を取り巻く環境に鑑み、少年警察活動に関して、当面は少年の非行の防止のための活動を引き続き推進しつつ、少年の保護のための活動により重点を置くことが求められていると考えられており、警察、関係機関がそれぞれの機能を発揮して、少年にとって最も適切な措置を講じていくことが重要だと考えております。こうした中、警察にとって、本日のシンポジウムは誠に時宜を得たものであり、このシンポジウムに警察の職員が参加し、議論に貢献できることは光栄なことでございます。

最後になりますが、本日のシンポジウムが盛会のうちに終わり、また、京都産業大学社会安全・警察学研究所および、本日ご出席、ご視聴されている皆さま方のますますのご発展を祈念いたしまして、私からのお祝いの言葉に代えさせていただきます。改めまして、本日は誠にありがとうございます。

伊藤史恵

文部科学省児童生徒課長

皆さまこんにちは。文部科学省児童生徒課長の伊藤でございます。本日は、京都産業大学社会安全・警察学研究所主催のシンポジウム「子どもの話を大切にする」の開催に当たり、一言ごあいさつ申し上げます。本日ご参加の皆さま方におかれましては、日頃より子どもの非行・被害防止に関しご尽力いただいております、厚く御礼申し上げます。

文部科学省においては、令和3年度に実施しました問題行動等調査におきまして、いじめの重大事案件数は増加傾向にあり、また不登校児童生徒数が過去最多になるなど深刻な状況が続いております。いじめ防止の対策につきましては、学校や教育委員会だけで対応することが難しい事案が散見するなどしたため、本年2月に重大ないじめ事案に関する学校と警察等関係機関との連携の徹底等を求める通知を発出し、各地域での警察連携の強化等の取り組みを求めているところ

です。

また、不登校の対策につきましては、本年3月に、誰一人として取り残されない学びの保障に向けた不登校対策COCOLOプランを取りまとめ、各地域におきます不登校児童生徒の学びの場の確保等、積極的な取り組みをお願いしているところです。

そして、児童生徒の自殺も深刻な状況であります。令和4年の児童生徒の自殺者数は過去最多になっており、国では本年6月に子どもの自殺対策に関する関係省庁連絡会議において、子どもの自殺対策緊急強化プランが取りまとめられ、各地域においても、自殺予防教育の推進や、リスクのある児童生徒の早期把握等の取り組みをお願いしているところです。

今お話ししましたとおり、昨今児童生徒を取り巻く時状況は大変厳しいものになっておりますが、いじめ、不登校、そして自殺のいずれにおきましても、児童生徒の話に耳を傾けることはもちろん、児童生徒の心の小さなSOSを見逃さないことが課題の早期発見と、その後の効果的な支援につなげる上で重要であることは言うまでもございません。

本日のシンポジウムでは、犯罪被害を話すことが難しい子どもを対象として、主に司法手続におきます内容であるとは伺っておりますけれども、悩みを抱える児童生徒の話やサインを受け止めると、そういった点においては、学校現場におきましても大変参考になるという内容であると確信しております。

最後に、皆さま方のますますのご活躍を期待申し上げますとともに、ご参集の皆さまのご健康と、そして本シンポジウムの盛会をお祈り申し上げ、私のあいさつといたします。

河 村 のり子

こども家庭庁支援局虐待防止対策課長

こども家庭庁支援局虐待防止対策課長の河村でございます。この度は、社会安全・警察学研究所設立10周年記念ということで、「子どもの話を大切にする」シンポジウムの開催に当たりまして、メッセージを寄せさせていただく機会を頂戴し、誠にありがとうございます。

私は、こども家庭庁で虐待防止対策に取り組んでおりますが、虐待防止の分野におきましては、まさに来年、令和6年の4月からの改正児童福祉法の施行に向けて、今準備を全国の関係者の皆様と進めているところでございます。改正児童福祉法の主な内容は、まさにお子さんが傷ついて、虐待が起こってしまった後に介入するのではなくて、もっとその手前のところで、市町村の家庭に対する支援力を強化して、子育てに困難を抱える家庭に対する支援を積極的に行い、支援を必要とされるご家庭がより早く支援につながっていくことができるよう、こども家庭センターの創設や、家庭支援の事業の創設など様々な取り組みを進めているところでございます。そうした改正児童福祉法の重要な内容の一つにも、一時保護や措置の際に、子どもの意見をしっかりと聞く仕組みを入れていくというような内容なども含まれているところでございます。

本日のシンポジウム、子どもの話をまさに大切にするということで、犯罪被害を受けたお子さんのために、いかに関係機関の連携を深めていけるかという大変な重要なテーマを取り扱われるとお伺いしております。こうしたシンポジウムで、ご参画の皆さまに、まさに今回はアメリカのNCACのリンダ様の基調講演や、まさに子どもの話を丁寧に聞いていくためにご尽力されておられます各界の活躍されている方々でご議論をされるということで、このシンポジウムがお子さんの声をしっかりと聞いて、お子さんを傷つけないように、みんなで多職種が連携を図っていくという在り方について、

学びの深い機会になりますことを、私どももお祈りを申し上げます。

最後になりますが、京都産業大学の社会安全・警察学研究所におかれましては、警察や児童相談所等、関係機関の協働を深めていくということをテーマに創設をされ、10 周年を迎えられたとお伺いしております。やはり児童相談所の側にとって警察というのは、このような研究所の取り組みなくしては、なかなか外から分かりにくい部分も多いですし、協働が実は少し敷居が高く図りにくいなど、様々な課題があると思います。貴研究所において、双方が理解を深めるためのハンドブックの作成等々にご尽力をいただいていることをお伺いしておりますので、改めまして御礼を申し上げます。

本日の機会が皆様方にとって良い機会になりますことを、心よりお祈り申し上げます。

仲 真紀子

理化学研究所 理事

理化学研究所の仲真紀子と申します。今日ここで話しさせていただく背景を申し、応援メッセージを述べさせていただきます。

私たちは、2008 年から 2012 年まで日本科学技術振興機構の研究助成を受けて、「司法面接法の開発と訓練」というプロジェクト、また、2012 年から 2015 年まで文部科学省、新学術領域、「子どもへの司法面接：面接法の改善その評価」というプロジェクト、そして再び 2015 年から 2019 年まで日本科学技術振興機構で「多専門連携による司法面接の実施を促進する研修プログラムの開発と実装」というプロジェクトを進め、現在は私の前任校であった立命館大学で司法面接研修事業を行っています。

この十数年にわたる研究の過程で、京都産業大学社会安全・警察学研究所の研究チームの皆さまとは、もうさまざまな形で研究交流をさせていただきました。特に印象深かったのは、平成 31 年 2 月に京都で開催されたシンポジウム「児童虐待対応のための警察と福祉の対話をめざして」です。ここでは、私も講演させていただき、ワークショップでは、警察関係者、福祉関係者の対話も行われました。警察から、現場の方々だけでなく、警察本部長も参加されていたのが印象に残っております。

また仲プロジェクトからスピンアウトしたトレーナーの会、司法面接の研修のトレーナーの会というのがあるんですけれども、そこでは司法面接に関する啓発ビデオを作成したことがあります。そこには田村教授にご参加いただいて、大変充実したものになりました。啓発ビデオは、司法面接支援室という私たちのホームページに上げてありますので、ぜひご覧いただければと思います。

さて、自己紹介や経緯の紹介が長くなってしまいましたけれども、司法や犯罪に関する研究は在野の研究者だけではなくなかなか立ち行かないというところがあります。司法・犯罪領域の実務家・専門家の方々の関わりあってこそ、実務のニーズを把握し、問題の解決や今まで用いられてきた方法のさらなる改善に役立つ研究ができるものだと思います。京都産業大学社会安全・警察学研究所は、警察からの信頼を得て、警察を含めた実態調査研究を行ったり、また警察組織のさまざまな立場の方々、組織のトップから現場の皆さま方に至るまで研究成果を広く伝えることができる、大変重要なそして貴重な組織だと思っています。

この組織が 10 周年を迎え、「子どもの話を大切にする ― 犯罪被害を受けた子のための多機関多職種連携 ― 」として記念シンポジウムが開かれますこと、とても心強く励みになります。このシンポジウムを節目に、ますます京都産業大学



社会安全・警察学研究所の発展に期待を寄せるとともに、みんなで手を取り合って、未成年者、障害のある方、外国に由来される方々、また、さまざまな理由で社会的に弱い立場に置かれている方々、いわばマイノリティーの人たち、私どももみんな含めてがっつい思いをすることのない、平等で公平で、安全で安心な社会ができるように、手を取り合って、本当に歩みを進めていければと思います。

どうもありがとうございました。そしておめでとうございます。